

江戸東京

たてものの園だより 61

Edo-Tokyo Open Air
Architectural Museum

◎特別展「日本のタイル100年―美と用のあゆみ」

◎収蔵建造物紹介―たてもの園の看板建築たち ④大和屋本店

◎昭和30年代再現展示「昭和の思い出、昭和のあこがれ」

◎令和5年度 事業予定

◎スケッチブック／たてもの園日誌

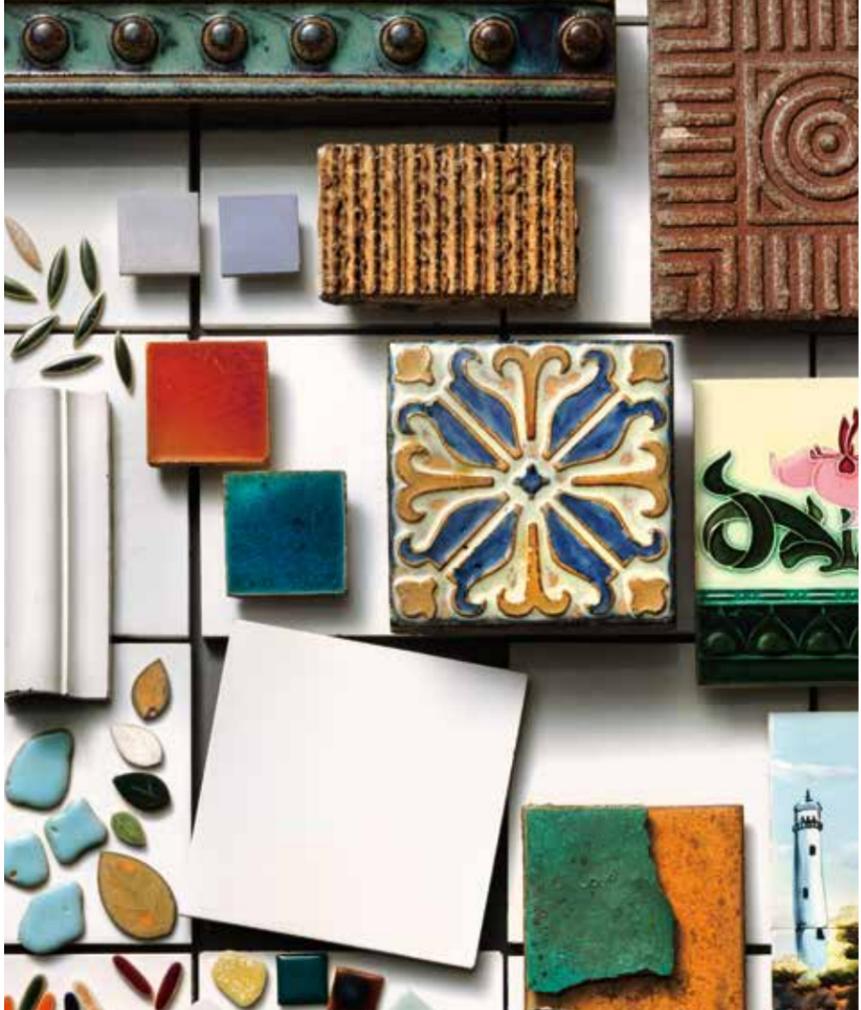


江戸東京たてもの園開園30周年記念
タイル名称統一100周年記念

特別展

「日本のタイル100年 美と用のあゆみ」

会期 2023年（令和5）3月11日（土）～8月20日（日）



上記写真のタイルはINAXライブミュージアム・多治見市モザイクタイルミュージアム所蔵 撮影：梶原敬英

本展は、INAXライブミュージアム、多治見市モザイクタイルミュージアムと当園の3館共同企画により開催する、日本のタイルの歴史を探る巡回展です。

展示会では、名称統一以前までに醸成されてきたタイル文化の変遷を辿りながら、台所、トイレや洗面所、ビルや大学、地下鉄の駅、銭湯など、さまざまな場で多種多彩に使われてきた日本のタイル100年のあゆみを時代背景とともに紹介します。展示を通して、美と用の間でタイルが果たしてきた役割を振り返り、暮らしや建築の未来を考える機会となれば幸いです。

第一章 日本のタイルの源流をさぐる

「物を覆う」という意味のラテン語「テグラ = tegula」を語源にもつ「タイル (tile)」は、建物の壁や床を覆う薄板状のやきものを指します。タイルは、古代エジプトにおいてピラミッド地下空間の壁面を飾ったものが起源とされ、水や火に強く、腐食しにくく汚れを落としやすい特性から、数千年の時を経て世界各地に広まりました。日本では6世紀に仏教と



柿右衛門色絵応龍文陶板 17世紀 写真提供：前坂晴天堂

もに「瓦」が伝来して屋根材として普及し、床に敷かれる敷瓦、壁に使われる腰瓦や瓦を貼り付けるなまこ壁なども見られるようになりました。そして幕末に西洋からタイルや煉瓦が伝わり、近代化の象徴のように様々な建築で用いられていきます。

本章では世界のタイルの歴史を概観するとともに、瓦の伝来に始まる日本のやきもの建材の変遷を資料より辿ります。

第二章 タイルの普及と名称統一

大正期に入ると、第一次世界大戦の影響による輸出増で「大戦景気」と呼ばれる好景気が生まれました。都市部では活況を受け大規模なビルのた美的価値と用的価値の変遷と、それを取り巻く時代の変化からご紹介します。

たてもの園内のタイル

タイルは関東大震災からの復興過程で、その装飾性や防火性能、衛生面に期待され多くの建築へ採用されました。大正末から昭和初期にかけてのものが多い当園では、外装、内装で様々な用途、形状のタイルを見ることが出来ます。展示会を楽しんでいただいた後、是非園内のタイルとその魅力も探してみてください。

(学芸員 沓沢博行)



平和記念東京博覧會全景鳥瞰図 1922年（大正11） 東京都江戸東京博物館所蔵



同潤会江戸川アパートメント食堂と壁面のタイル 撮影：兼平雄樹



建築が多数計画され、外装タイル張りの建築も現れ始めます。一方で庶民生活においてもこの時期、旧来の生活様式を欧米型のより合理的なものへ改めようという「生活改善」の動きが活発化します。スペイン風邪（インフルエンザ）に代表されるような伝染病の流行を防ぐための衛生思想の普及と合わせ、水回りや床へタイルの導入が進んでいきました。

しかし需要拡大の中、歴史的な経緯からタイルは「敷瓦」「腰瓦」「張付煉瓦」「化粧煉瓦」など様々な名称で呼ばれ、業者にも利用者にも不便が生じていました。そこで1922

年（大正11）4月12日、上野公園で開催中の平和記念東京博覧会内の施設で開かれた全国タイル業者大会において「タイル」の名称統一が決議

されます。名称が統一されたことで複数の呼び名で取引されていた市場での混乱は解消され、タイルは工業製品として普及していきます。

第三章 美と用の100年史

本章では、タイルの普及が進んだ背景と、名称統一の舞台となった博覧会について資料から明らかにしていきます。

タイルの名称統一により市場の混乱は解消しましたが、「敷瓦」や「化粧煉瓦」のように名称から判断できなかった使用部位や用途などの情報は失われ、壁用か床用かなどの新たな分類基準を設ける必要が生じました。1929年（昭和4）に日本標準規格「JES」によって形状や寸法が定められ、タイルは工業製品としての歩みを進めます。その一方でタイルにやきものとしての美を求め、手工によって装飾性の高い美術タイルを生み出す人々もおり、タイルに彩られた名建築が数多く現れました。

壁や床の表面仕上げ材であるタイルには、建物自体を保護する実用性（用的価値）と空間を彩る装飾性（美的価値）を兼ね備えることが求められます。本章では、都市や公共空間、身近な生活空間などあらゆる場面で使われてきた日本のタイル100年のあゆみを、タイルに求められてき



子宝湯浴室のタイル 1929年（昭和4） 江戸東京たてもの園内

昭和30年代再現展示 「昭和の思い出、昭和のあこがれ」



問取りのアンケート



ワークショップの様子



展示の様子

室内再現展示は都内各博物館でも比較的多く行われている展示手法ですが、今回展示するにあたり、たてもの園らしく情景を再現するために、「音」をキーワードに構成しました。柱時計は毎日時を刻み、正午には12回ボンボンと鳴ります。黒電話はワークショップ時

昭和30年代の住まいの再現展示

江戸東京たてもの園では『たてもの園だより第60号』で紹介した「さわれるたてものもけい」の他、少子高齢化対応プログラムとして回想法的手法を取り入れた再現展示を行っています。回想法とは、昔の身の回りの道具などに触れて思い出を語り合うことで記憶を呼び覚まし、脳の活性化を促す心理療法です。展示では昭和30年代の室内を再現し、当時の生活の様子やくらしの移り変わりについて紹介するとともに、ワークショップ時には展示物に触れられるようにしました。

ない世代の方からは、「ダイヤルが重たく感じた」「音量調整がなく、相手の声が小さかった」など新鮮に感じたようです。知っている方にとっても「黒電話のベルってこんなにうるさかった?」「ダイヤルがゆっくり戻る間隔が懐かしい」など反応は様々です。

黒電話の通話体験

ワークショップでは、展示している黒電話を、ISDNターミナルアダプターを介して別の黒電話につなげ、参加者同士が話せるようにしました。受話器を持つ、ダイヤルを回す、話す、聞くと様々なアクションが含まれ、世代間の交流にもなります。黒電話を知らない世代の方からは、「ダイヤルが重たく感じた」「音量調整がなく、相手の声が小さかった」など新鮮に感じたようです。知っている方にとっても「黒電話のベルってこんなにうるさかった?」「ダイヤルがゆっくり戻る間隔が懐かしい」など反応は様々です。

このように、ひとつひとつの家具・家電から様々なストーリーをつなげ、世代間交流が深まるようなプログラムにしていきたいと思っています。

(学芸員 溝邊悠介)

収蔵建造物紹介

たてもの園の看板建築たち ④大和屋本店

看板建築最大の魅力は、なんといっても個性豊かな外観です。ひとつひとつの建物が、隣に負けないよう、趣向を凝らしたファサードで競い合っています。たてもの園の看板建築も同様で、どの建物も見事なまでに個性的で違う顔を見せてくれます。

共通する特徴があるとなれば、洋風の趣を持つ点でしょう。明治時代に西洋の建築表現が日本に入ってきて以来、洋風のハイカラな雰囲気を伝統的な和の要素とどのように折衷するかが重要なテーマとなりました。昭和初期に建てられた看板建築も、洋と和を巧みに融合しながら、都市を彩っていったのです。

ところが、今回紹介する大和屋本店は、1階北側のたばこ屋さんコーナーを除くと、洋風の雰囲気がほとんどなく、純和風という印象が強い建物です。とくに3階部分は、柱などの木材が外観に露出される「真壁造り」で、漆喰塗りの壁や連子窓からなる堂々とした和風の意匠です。そして、軒下。写真(下)のように出桁造り(壁に取りついた腕木が、出桁と呼ばれる軒先の長い横材を支える形式)になっています。そのため、同じ東ゾーンにある川野商店や小寺醤油店などと同様、伝統的な町家の系譜にあると思ってしまうのですが、大和屋本店は以下の2点において、看板建築と分類すべき建物なのです。

○間口寸法に対して高さ寸法が非常に大きく、縦長のプロポーションが著しい(出桁造りをはじめ、伝統的な日本建築は、横長のプロポーションをとります)。

○軒の出が深いように見えますが、実際は軒下分をセットバックさせているのであり、1階壁面より軒が出ることはありません。つまり、「軒の出」ではなく、「軒の入り」、もしくは「軒の凹み」というべきでしょう。

ところで、大和屋本店が建っていたのは、港区の白金台4丁目。白金や白金台というエリアは、戦後こそ先端的な地としての印象が強くなりましたが、戦前は、むしろ伝統

的な建物が立ち並ぶ地域でした。たてもの園に移築されている伊達家の門(大正期/旧所在地:港区白金2丁目)や小寺醤油店(昭和8年/旧所在地:同5丁目)も、建った年代に比して復古的なデザインを纏っています。大和屋本店もまた、看板建築という最先端のモードを骨格としながら、白金・白金台地域独特の復古的な性格を、出桁造りのディテールによって表現した建築であると解することができるでしょう。

(研究員 米山 勇)



2023年4月 ▶ 2024年3月 事業予定

毎月、建造物や季節にちなんだ催事を開催します。

展示室の催し

日本のタイル100年

—美と用のあゆみ

2023年3月11日(土)～8月20日(日)

江戸東京博物館コレクション展

～江戸東京のまちづくり～

2023年9月16日(土)～12月17日(日)

江戸東京博物館コレクション展

～江戸東京のくらしと乗り物～

2024年3月23日(土)～7月7日(日)

4月

8日(土)・9日(日)

伝統工芸の実演

墨田区の職人さんが実演。

4日(木・祝)・5日(金・祝)

こどもの日イベント

こどもの日にちなんだ、昔のあそびやくらしの体験を楽しもう!



5月

13日(土)・14日(日)

伝統工芸の実演

荒川区の職人さんが実演。

6月

10日(土)・11日(日)

伝統工芸の実演

練馬区の職人さんが実演。

7月

8日(土)・9日(日)

伝統工芸の実演

豊島区の職人さんが実演。

5日(土)・6日(日)

【夜間特別開園】

たてもの園 下町夕涼み

開園時間を延長して、夏の夕べの過ごし方を体感していただける催しです。伝統的な日本の民家では、宵の涼やかな風を感じながら過ごしていただけます。



8月

12日(土)・13日(日)

伝統工芸の実演

江戸川区の職人さんが実演。

9月

9日(土)・10日(日)

伝統工芸の実演

品川区の職人さんが実演。

10月

14日(土)・15日(日)

伝統工芸の実演

北区の職人さんが実演。

11月

11日(土)・12日(日)

伝統工芸の実演

江東区の職人さんが実演。

11月

25日(土)・26日(日)

【夜間特別開園】

紅葉とたてもののライトアップ

紅葉が深まる時季に合わせ、色づく木々と建物をほのかな光で美しく照らし出します。日中とは趣の異なる建物の魅力を体感していただけます。



12月

9日(土)・10日(日)

伝統工芸の実演

中野区の職人さんが実演。

1月

2日(火)・3日(水)

江戸の正月を楽しもう

新しい年はたてもの園から。園内の建物には、しめ飾りや門松を立てて、獅子舞や太神楽などの新年にふさわしい伝統芸能をご覧ください。



2月

10日(土)・11日(日・祝)

伝統工芸の実演

大田区の職人さんが実演。

3月

9日(土)・10日(日)

伝統工芸の実演

板橋区の職人さんが実演。

27日(水)・28日(木)

たてもの園フェスティバル

桜のつぼみがほころぶ3月28日はたてもの園の開園記念日。おとなも子どもも楽しめるさまざまな催しで盛り上がります。



28日(木)

たてもの園開園記念日 (入園無料)

伝統工芸の実演

東京の伝統工芸士による実演です。毎月第2土曜日と翌日の日曜日に、月替わりでいろいろな技を見ることができます。



ミュージアムトーク

毎月第4土曜日
当園の学芸員、研究員、建築技術専門員が解説をします。



ちょっと涼しいたてもの園 (夏期)

夏仕様の建具や軒先の風鈴、民家の蚊帳、日差しを遮る緑のカーテンなど、暑い夏に「涼」を取り入れる暮らしの工夫をご覧ください。



綱島家年中行事

梅の土用干し・盆棚飾り・十五夜飾り・十三夜飾り・冬の大根干し・小正月の蔦玉飾り・節分など、季節に応じた年中行事の展示を実施しています。



たてもの園で生き物探し

千鳥破風、鴨居、猫間障子、雨戸の鍵の猿等々、建築用語には、生き物の漢字が使われたものがとてもたくさんあります。吉野家の式台にはツルの彫刻がありますが、こちらは兎毛通しと呼ばれ、今年の干支であるウサギの漢字が使われています。兎毛通しは、唐破風にある懸魚と呼ばれる部材のことで、懸魚の中でも特に装飾性が強いものです。

なぜ、このように建築用語に生き物の漢字が多用されているのかはよく分かっていないようです。しかし、中には諸説が伝わっているものもあります。



小出邸の猫間障子



旧自証院霊屋の懸魚

例えば懸魚は、火伏せのまじないの意味合いが強く、元々水を連想させる「魚」の尾ひれの形であることに由来しています。次第に装飾化し、梅の花や猪の目と呼ばれるハートのような形などに変わっていききました。また、鴨居も一説には水辺にいる「鴨」から水を連想させ、火伏せの意味が込められています。そして猫間障子は、猫が入りしやすいように作られたことに由来しています。園内では小出邸の二階で見られます。

(学芸員 生田真菜)

たてもの園日誌 2022年(令和4)10月~2023年(令和5)3月

2022年(令和4)

- 10/1(土) 都民の日<入園無料>
- 10/4(火)~10(月・祝) 綱島家年中行事「十三夜飾り」
- 10/8(土)・9(日) 伝統工芸の実演「型染・木版染/村山大島紬」
- 10/22(土) ミュージアムトーク「昭和の思い出、昭和のあこがれ」
- 10/29(土)・30(日) 東京大茶会2022(主催:東京都、アーツカウンシル東京)<入園無料>
- 11/12(土)・13(日) 伝統工芸の実演「木工建具/和裁(たっつけ)」
- 11/26(土) ミュージアムトーク「特別展『江戸東京博物館コレクション—東京の歩んだ道』みどころ」
- 11/26(土)・27(日) 夜間特別開園 紅葉とたてものライトアップ
- 11/30(水)~12/24(土) 綱島家年中行事「大根干し」
- 12/10(土)・11(日) 伝統工芸の実演「組紐/椅子張」
- 12/24(土) ミュージアムトーク「田園調布の家(大川邸)のクリスマス」
- 12/25(日)~1/1(日・祝) 年末年始休園

建造物修繕などの工事

- 鍵屋(居酒屋) 令和4年11月1日~令和5年3月下旬
- 花市生花店 令和4年11月15日~令和5年3月下旬
- 万世橋交番 令和4年11月22日~令和5年3月下旬
- 村上精華堂 令和4年11月29日~令和5年3月下旬

2023年(令和5)

- 1/2(月・休)・3(火) 正月特別開園<入園無料>
- 1/9(月・祝) 成人の日はたてもの園へ
- 1/11(水)~1/15(日) 綱島家年中行事「小正月・繭玉飾り」
- 1/14(土)・15(日) 伝統工芸の実演「畳刺/東京手描友禅」
- 1/28(土) ミュージアムトーク「特別展『江戸東京博物館コレクション—東京の歩んだ道』みどころ」
- 2/3(金) 綱島家年中行事「節分」
- 2/11(土・祝)・12(日) 伝統工芸の実演「東京染小紋/念珠」
- 2/25(土) ミュージアムトーク「旧自証院霊屋」
- 3/11(土)・12(日) 伝統工芸の実演「江戸木彫刻/東京手描友禅」
- 3/11(土)~8/20(日) 特別展「日本のタイル100年—美と用のあゆみ」
- 3/18(土)~ 開園時間を夏時間に変更
- 3/20(月) 臨時開園
- 3/27(月) 臨時開園
スペシャル・ミュージアムトーク
「けんちくはかせに聞く 建物はこう楽しむ!」
- 3/27(月)・28(火) たてもの園フェスティバル
- 3/28(火) たてもの園開園記念日<入園無料>

INFORMATION

開園時間 4月~9月 9:30~17:30
10月~3月 9:30~16:30
※入園は開園の30分前まで

休園日 毎週月曜日(月曜日が祝祭日の場合はその翌日)
年末年始

交通 JR中央線「武蔵小金井」駅よりバス5分 北口2・3番のりばから→「小金井公園西口」下車、徒歩5分
西武新宿線「花小金井」駅よりバス5分 「南花小金井」(小金井街道沿い)から武蔵小金井駅行き→「小金井公園西口」下車、徒歩5分
※こ来園の際は公共交通機関をご利用ください。当園専用駐車場はありません。車の場合は、小金井公園内の有料駐車場をご利用ください。

入園料 一般 400円(320円)
65歳以上の方 200円(160円)
大学生(専修・各種含む) 320円(250円)
高校生・中学生(都外) 200円(160円)
※()は有料入園者20名様以上の団体料金
小学生以下および都内在住・在学の中学生は無料

